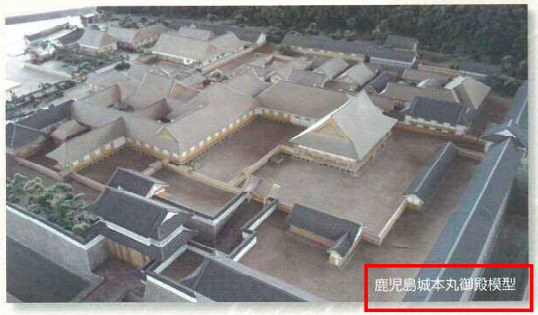
鹿児島（鶴丸）城跡では，これまで多くの発掘調査が実施され，大量の瓦が出土しています。御楼門の復元工事では，発掘調査で出土した瓦を参考に，鬼瓦のデザインや小菊瓦・軒丸瓦・軒平瓦といった各種瓦の文様が決められました。

鹿児島県立埋蔵文化財センター提供

常設展示のご案内

志布志城模型



鹿児島城本丸御殿模型

日本遺産

FUMOTO

薩摩の武士が生きた町
～武家屋敷群「麓」を歩く～

常設展示では，日本遺産「薩摩の武士が生きた町～武家屋敷群「麓」を歩く～」の構成資産でもある，鹿児島（鶴丸）城の本丸御殿の想定復元模型や，志布志城・出水麓のジオラマをはじめ，鹿児島の歴史を語る数多くの貴重な資料をご覧いただくことができます。

公式ホームページ

お問い合わせ先
鹿児島県歴史・美術センター黎明館
〒892－0853　鹿児島市城山町7番2号
TEL：099－222－5100（代表）
https://www.pref.kagoshima.jp/reimeikan/

薩摩藩島津氏歴代の居城

鹿児島(鶴丸)城跡

旧御本丸御楼門前之景（部分）　玉里島津家資料

鹿児島（鶴丸）城の歴史

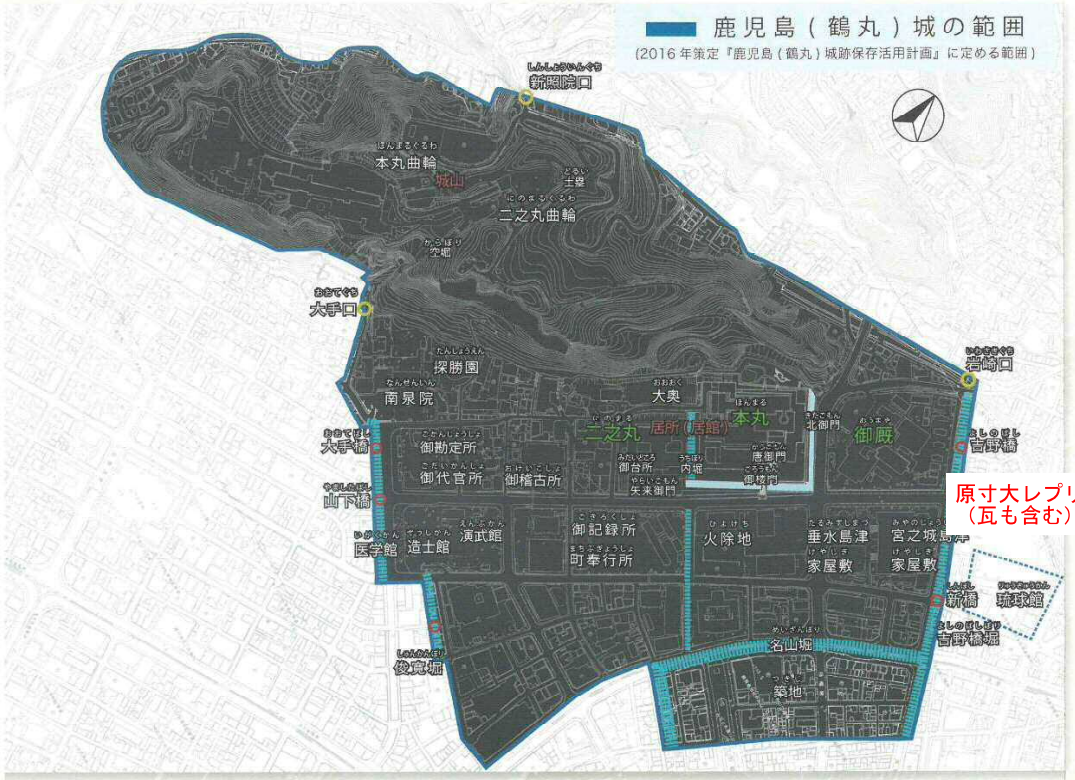
鹿児島城は，初代薩摩藩主島津家久が，関ヶ原の合戦直後の慶長6（1601）年頃に築城を始め，慶長末（1615）年頃にほぼ完成したとされています。

城の正式な名称は「鹿児島城」で，「鶴丸城」の呼称は，背後の城山の形が，鶴が舞っているように見え，鶴丸山と呼ばれたことにちなむと，江戸時代後期の『三国名勝図会』に記されています。

明治をむかえ，明治2（1869）年には知政所となり，明治4（1871）年の廃藩置県で12代藩主島津忠義が去るまで，270年余り島津氏の居城として，近世鹿児島の政治の中心でした。

しかし，本丸は明治6（1873）年の火災で，二之丸は明治10（1877）年の西南戦争で共に焼失しました。

明治中期以降は，本丸跡に中学造士館，次いで第七高等学校造士館が設置され，戦後は，鹿児島大学の文理学部，次いで医学部がありました。その後，昭和58（1983）年に明治百年を記念して黎明館が開館し，現在に至っています。

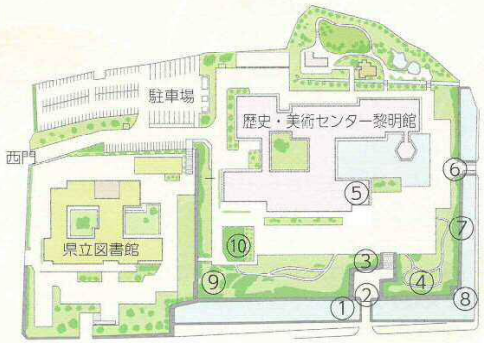


原寸大レプリカあり（瓦も含む）

本来の鹿児島城は，背後の山城（城山）と麓の居館からなる城です。山城への出入口は，北の岩崎口，南の大手口，西の新照院口の３か所あり，北側は吉野橋堀，南側は大手橋堀や俊寛堀という外堀で守られていました。

藩主の居所（居館）は，城山を背にして建てられ，居所を中心に，周囲には各種の役所や家臣の屋敷が配置され，海側へ向かって城下町が築かれました。琉球国との交易拠点となる湊には築地を整備しました。

見どころマップ



①石橋

慶長11（1606）年に楼門前の橋の渡り初めを行ったとの記録が残っており，鹿児島城築城当初から橋が架けられていました。

元々は木橋でしたが，たびたび損傷があったため，文化7（1810）年に幕府へ願い出て，石橋に架け替えられました。

③石垣の弾痕

御楼門部周辺の石垣には，無数の凹みが見られ，なかには銃弾や砲弾の破片が食い込んでいるものもあります。これらの多くは，明治10（1877）年の西南戦争の際の痕跡です。これらの弾痕は，当時の戦闘の凄まじさを今に伝えています。

⑤鬼瓦・鯱（レプリカ）

御楼門の屋根の棟には鬼瓦と鯱が据えられています。これらには，建物の装飾性や魔除けの意味が込められています。鬼瓦は，他の城だと家紋や縁起を担いだ吉祥文様などが多く見られますが，御楼門周辺での発掘調査で，鬼面の鬼瓦が多く出土したことから，出土品を参考に，鬼面の鬼瓦が製作されました。

鯱は天保15（1844）年に，家臣名越時敏が記した日記（『常不止集』）に，「これまで瓦であったものを，唐金（青銅）のものに改めた」とあったことを参考に青銅製のものとしています。

復元された鬼瓦は高さ約1.1m，鯱は高さ約1.8mもあり，実物大のレプリカを間近で見ることができます。

⑦鏡石

石垣の中にある他の石よりもひときわ大きな石は，鏡石と呼ばれるものです。城主の権威を示したり，魔除けの意味が込められているともいわれ，多くの城で見ることができます。

⑨御角櫓跡

長さ約20m，幅約7.5mほどの建物と推定されています。「御角屋蔵」と書かれたものもあることから，物品収蔵施設としての用途もあったと思われます。鶴姫（のちの天璋院）がここから祇園祭を見たとの記録が残っています。

鶴丸城御楼門建設協議会提供

②御楼門

鹿児島（鶴丸）城本丸正面にあった，薩摩藩で最上格の門です。藩主格以上の者と藩の上級家臣など限られた者だけが通れる門で，通行が許されていたのは100人程でした。朝6時開門，夕方6時閉門で，通行しようとする者はここで下馬し，門番のチェックを受けました。復元された御楼門は，高さ・幅約20m，奥行き約7m，総重量約320ｔを誇り，史実等に基づいて復元されました。

④多聞櫓跡

御楼門から北御門にかけての石垣沿いにあった長屋の建物で，成尾常矩指図には，「御兵具所」と記されています。武器類を保管していたと考えられ，礎石や排水溝が確認されています。

⑥北御門跡

北御門は，古写真によると，切妻屋根の瓦葺きの長屋門であったと思われます。発掘調査で礎石や敷石の一部が確認されています。北御門の前の堀に架かる橋は土橋で，暗渠形の排水溝が埋設されていました。

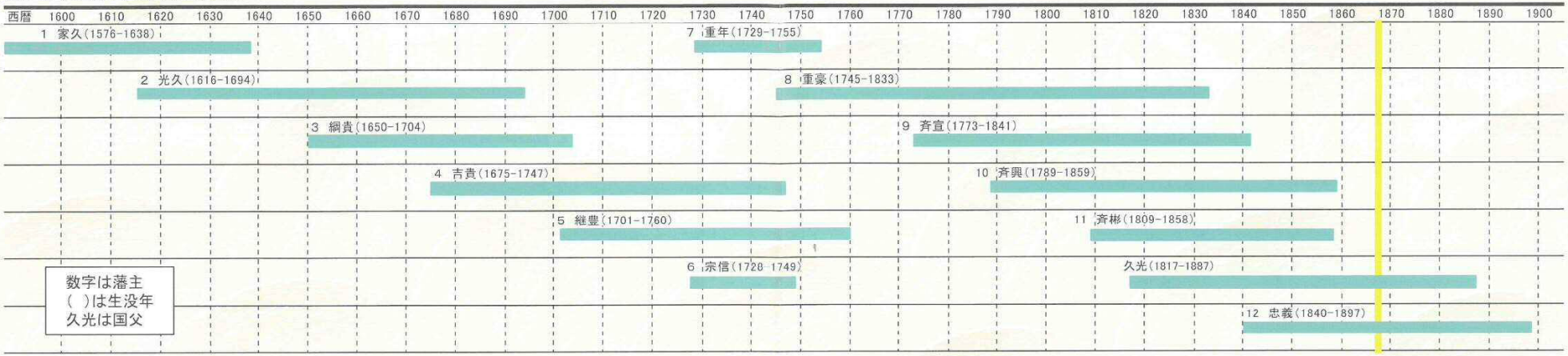
⑧隅欠

城の北東の石垣は，角の部分を切り取った形になっています。これは隅欠と呼ばれるもので，災難を取り除くため，「鬼門」にあたる城の北東部分の石垣の角をわざと欠けさせたものです。

⑩麒麟の間跡

本丸内には大小合わせて100を超す部屋があったといわれ，この場所には，かつて麒麟の間と呼ばれた部屋がありました。建物の基礎があった位置を植栽で示してあります。麒麟の間に隣接して能舞台や庭園がありました。

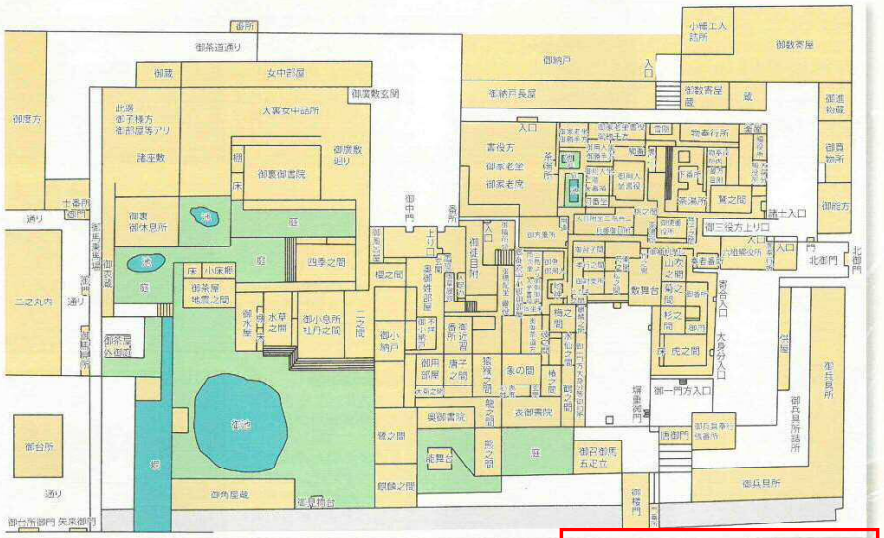
鹿児島（鶴丸）城の歴代城主



▲明治維新（1868年）

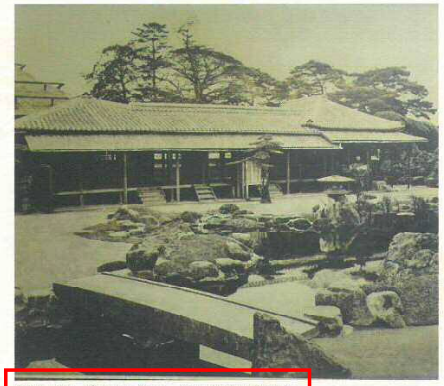
明治４（1871）年の廃藩置県により，藩主島津忠義が鹿児島城から退去すると，鹿児島城本丸には鎮西鎮台の第２分営が設置され，殿舎は兵士の屯所へと変わりました。幕末の藩士で金山奉行等を勤めた成尾常矩は，日常慣れ親しんだ鹿児島城の変貌と殿舎の荒廃を嘆き，城周辺の見取図と本丸内間取図を作成しました。

この指図によると，本丸内にはかつて大小合わせて 100 を超す部屋があったことが分かります。常矩の思いも虚しく，明治６（1873）年，火事により本丸と御楼門は焼失してしまいました。



鹿児島（鶴丸）城本丸間取図（成尾常矩指図）

御小納戸・二之間・牡丹間等・御池（玉里島津家資料）



麒麟之間・鶴之間・御池（玉里島津家資料）

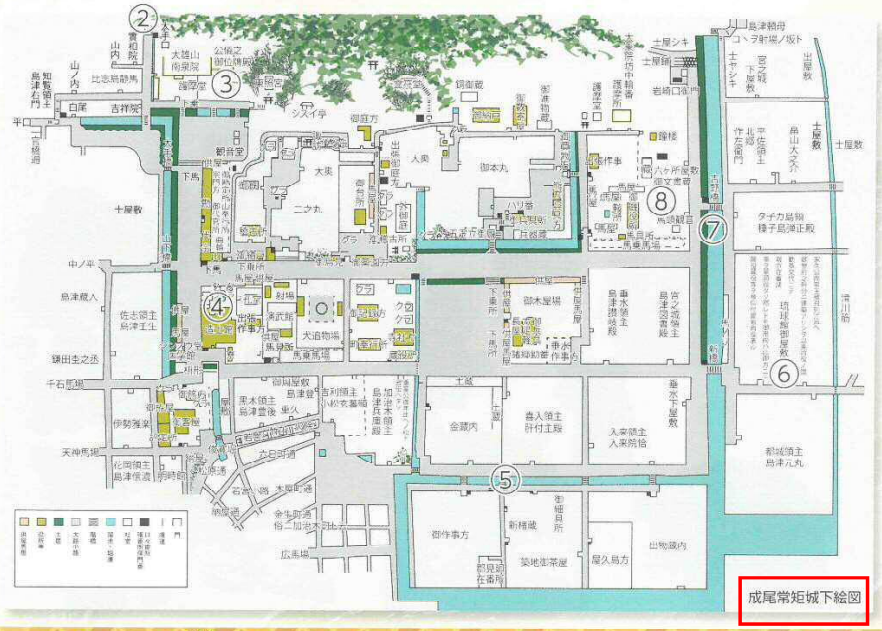
御池（玉里島津家資料）

鹿児島城本丸内に関しては，明治５年の明治天皇行幸に随行した写真家内田九一が撮影した写真が残されています。

これらの写真からは，寄棟造の土庇の付く書院造で，瓦葺や平木葺の建物や，池や立石が配置された端正な庭園があったことなどが分かります。

近年の発掘調査で，立石や玉石などが確認され，写真に写っている庭園の一部が土中に残っている可能性が高いことが分かりました。かつて庭園を構成していた石材は，鴨池動物公園に移設されていましたが，黎明館建設を機に再び戻され，敷地裏に御池が復元されました。

文政４年 鹿児島御城下明細図・鹿児島都市計画図合成図　鹿児島県教育庁文化財課提供



成尾常矩城下絵図

山の城と麓の館

①二之丸曲輪（にのまるくるわ）
現城山公園ドン広場周辺

②大手口（おおてぐち）
現城山遊歩道入口周辺（照国神社側）

天保年間鹿児島城下絵図　玉里島津家資料

③南泉院（なんせんいん）
現照国神社周辺

⑤名山堀（めいざんぼり）
現鹿児島市役所前電車通り周辺

⑦吉野橋堀（よしのばしぼり）
現桟橋通り周辺

④造士館（ぞうしかん）
現鹿児島市中央公園

⑥琉球館（りゅうきゅうかん）
現長田中学校周辺

⑧御厩（おうまや）
現鹿児島医療センター